

女侍

紅蓮ノ襦

神楽陽子

表紙イラスト：みかみん

試し読み版

二次元ぷち文庫

**当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『女侍 紅蓮ノ楓』に基づいて作成しております。**

※本作は二次元ぶち文庫『女忍 白銀ノ沙希』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



女侍

紅蓮ノ襦

神楽陽子

表紙／みかみん

登場人物紹介

Characters

かえで

楓

困っている人は放っておけないタイプの女侍。現在は親友の沙希とともに人間に害なす魍魎を狩る旅を続けている。炎を操る剣を振るう。

さき

沙希

あくまでも任務を優先するクールなくノー。その性格からか楓と衝突することも多いが、互いに信頼しあっている。

もうりよう

魍魎

人間を食らう化け物。獲物が女性の場合は、孕ませ、魍魎を産ませてから食らう。

日課を終えた農民と広大な田圃を夕陽が橙に染め、微風が草木を優しく撫でる。いまは昔のこと、名もない山村の住人が各々の家に戻っていく。

独り身の男たちが一軒の茶屋に集まって夕食を共にするのはいつものこと、今日も軽い杯を交わして晩餐が始まった。

しかし、誰ひとりとして酒を樂しむ余裕はなかった。疲労のせいではない、皆が不安を顔にありありと浮かべ、大の男さえヒソヒソと小声で呟く。

「今朝も出たつてよ、例の物の怪」

「一昨日は孫六が襲われそうになったというじゃないか」

村はいま、ある危機に瀕していた。犬や猫、狼の類ではない、明らかに「物の怪」と形容すべき異形の生物たちが、最近になって頻出するようになったのである。

しかも、怪物どもは人間を「標的」とみなしているらしかった。実際に襲われて命からがら逃げた者の話によれば、物の怪は言葉を発したという。

『ニンゲン……エサ、殺シテ食ウ』

これでは酒を片手に疲れを癒すどころではない。食事が冷めることも忘れて、村の男たちは難題に頭を悩ませる。

「お上に報せに行った茂吉はまだか？」

「まだ帰って……いや、お上がこんなチンケな村を助けしてくれるとは思えねえ」

もはや八方塞がり、村が破滅を迎えるときは刻々と迫っていた。

ふと、ひとりの男が茶屋の隅を指差す。

「おい……気づいてるか？」

「俺も気になっていたらところだ。ありや、何者だい？」

辺鄙なこの村に外来者とは珍しい。それも、ただの旅人にしては妙過ぎる。

視線を集める彼女、女性は、左腰に立派な野太刀を携えていた。

眉目秀麗にして、白い頬肌には茹で卵のような張りがあり、直立すれば腰まで届くのであろう長髪を後頭部でひとつに束ねている。髪の色は漆を塗ったかのごとく照り輝くまさに漆黒、瞳も同じ輝きを宿す。

ゴクリ、と男たちが咽を鳴らしたのも当然だった。完成された「美貌」を目にしたからである。

が、村人の驚きはむしろ彼女の格好にあった。白い袴をひとえ一重、その上から紅の胴当てをまわし、両手には同色の手甲を嵌はめている。そして前髪をかきあげる額当て。

「女が……侍、か？」

男であるべき侍が女なのだ、誰もが目を瞬かせる。腰を鎧で絞った体たいく軀は、女体に特有の乳房を有し、襟の袷を丸々と雄大に押し上げていた。その双曲線は、女が見ても羨望の

対象となることだろう。

「珍しいな、女の傾奇か……あの刀もすげえぞ」

しかも腕力で男に劣るはずの女性が、一般的に士族が使用する刀剣よりも大振りな「野太刀」を帯刀しているのだ。長さは刃長約九十三センチ二尺八分で重さは三斤強約一キロ、とても女子供が扱える代物ではない。

「関わらないほうがいいぜ」

村人は揃って顔を背け、黙々と食事を始めた。

その沈黙を埋めるように彼女——かえて楓が声を荒げる。

「この近くで魍魎が群れてるのよ、放っていくって言うの!？」

他の席からは死角になって見えない向かい側には、もうひとり別の女性がいた。こちらは物陰にスウツと溶け込みそうな黒装束、女忍者の沙希さきである。

沙希はみたらし団子を噛み締めてから、ようやく答えた。

「私たちの任務は、一刻も早く亜の国から魍魎どもを駆逐することだ」

先ほど村人の話に拳がっていた物の怪とは、正しくは「魍魎」という。人肉を好む魔性の生き物であり、古くから陰で人の世を脅かしてきた。男はそのまま丸かじり、女は同胞すなわち魍魎の子を産ませてから食らう。

楓と沙希は、その脅威から人々を守るために戦う「狩人」だった。揃って出身は光深こうみの里、魍魎きょうりょう狩りの発祥の地である。ここで生を受けた者は、誰もが修行を積んで狩人となり、一人前になれば里を出て戦いに赴く。

ふたりはいま、魍魎の暴拳に苦しむ亜の国を救うため急行している最中だった。ところが道中、この村の付近で狩るべき魔物の存在を感じした。

直情家の楓は、いまこそ剣を振るうときと豪語するのだが。

あくまで冷徹な沙希は反対し、口論となった。

「ついさつき伝書鳩を放つたろう。三日もすれば他の狩人がくる」

楓は義を重んじる「侍」、対する沙希は任務を優先する「忍」であり、こうして衝突するのはいつものことだった。何もかもが正反対、沙希が団子を口に運べば。

「あたしの前で、そういう甘ったるいの食べないで……見てて気持ち悪い」

「貴様こそ。私の前で辛子明太子なぞ口にしてみる、容赦せんぞ」

この遣り取りも何十回目か。楓が団子を皿ごと取り上げる。

「そんな言葉遣いだから、未だにオトコのひとりも寄ってこないのよ」

「墓穴を掘つたな。そういうお前も、腕っ節ばかりで色恋沙汰とは無縁だろうが」

話が幾分逸れたところで本題に戻る。

「そ、それはともかく！ 三日のうちに村の誰かが死んだりしたら、どうするのよ！」

女忍者は素早く菓子を取り返し、人情家をギロリと睨んだ。

「亜の国ではもう死んでゐる。第一、国と村では重みが違う。寄り道している場合か」

「う……で、でも、魍魎から人々を守るのが狩人の役目じゃない！」

沙希は決して冷酷ではない、少しでも多くの人命を救うために急ぐことを主張する。しかし楓は、相方の言い分を理解しながらも情で動いてしまう。

噛み合わない口論に決着はつかず、楓はひとり席を立つのだった。

「わかつたわよ、あたしはあたしで勝手にやる。じゃあねッ！」

怒鳴り声に他の客が驚く中、沙希が念を押すように繋ぐ。

「十五分だ。忘れるな」

「——フン、言われなくても！」

女侍は歩みも荒く、茶屋を出て夜の闇に消えていった。

左腰に刀を携えた女侍は、道のない森を歩んでいた。今宵は月が明るく、夜目が利く。

「まったく……沙希のヤツ」

薄袴に映ろう脚線はしなやかで、胴当てを着けているとはいえ足取りは女らしい。裾からチラチラと覗くのは長旅に耐えうる丈夫な草鞋、それと足袋をきつく結んである。

苛立ちいらだから、彼女は手頃な小石を蹴り上げた。

快悦はさらに上昇して、脳髓から思考の隅まで官能の波動が行き着いた。緩んだ眉尻がこめかみまで落ちたところを、歯で食いしやる。

(こ……こんな、もの)

しかし肝心の肉体は火照りを超えた過熱にあり、とても本能に抗える状態ではない。ザワザワと微震する肌には玉の汗が浮かび、吐息は甲高く色めいてしまった。

「はああ！ はあ……や、やめ……てつたら」

『少し入レラレタダケデ、コレカ！ 見テミロ、コノ乳首！』

乳輪からの膨張に魍魎どもは目玉をぎらつかせた。いまやサラシは触手に替わり、右房は吸盤で乳白肌の全面を吸われ、左は中腹を括れるまで搾られ。

余っていた右乳首にも、蛇の頭と化した別の触手がしゃぶりつく。

軟体とはいえ吸引する力は人間を遥かに凌駕りょうがしており、重感に溢れる豊乳さえ、先端を引つ張られて輪切り檸檬の形に伸びた。

食欲をそそる量と弾みで、物の怪が増して粘液を垂らす。自身を彼奴らの「餌」と自覚した楓は、肛快と乳悦に挟まれてまどろみながらも、右手に念を込めた。

(だめ……は、反撃、よ！)

しかし物の怪は彼女が息む瞬間を待っていたのか、程よくぬかるんだ蜜壺に剛直の残りを一気に押し込んだ。楓が思わずいななく。

「んああああ!!」

ブチリと肉が切れ、気色の悪い異物感が腹まで昇ってくる。ただでさえ熱化した身体の中で、子宮は溶鉱炉のごとく燃え盛った。

(な……なん、なの……いまの……)

空白になった脳裏に、膣で感じる肉の硬さ、太さが鮮明に浮かぶ。

薄膜を破られて犯されたのだ。

(あたしの、こんな奴らに……)

破瓜の衝撃に女侍はしばし呆然ぼうぜんとした。まさかこのような形で純潔を奪われるとは。しかし思考が暗転しようにも、ミチミチと襷を抉って小道を突き進んでくる陵辱感が、楓を辛い現実に引き摺り戻す。

ところが底の子宮口を小突かれた刹那、彼女の唇が卑猥な笑みを見せた。

——キモチイイ。

ハッとして頬の肉を引き締めるが、下がった眉尻は持ち上がらない。幾本もの触手を映して慄おそいでいたはずの双眸そうまうが、目尻から蕩たろけていく。

「こ……こんな、の……ッ!」

屈辱を燃やして右手を伸ばすが、地に落ちた愛刀はあまりに遠い。宙を掻いても、醜くビクビクと脈動する肉の柄しか掴めなかった。「柄」と呼称するには二回りも太く。

（もう……いい、や……）

このまま気を失ってしまえば、どれだけ楽だろう。

しかし鮮烈なもう一撃が、楓の双眸を大きく見開かせた。

「ひああああ!？」

魍魎は三匹、残る一匹も牝の陥穽を味わわんと、既に一本の剛直を含んだ淫穴に切っ先をあてがったのだ。尖った粒身を圧迫され、鮮烈な喜悦の波動に覚醒する。

『俺モ頂クゾ！ ゲゲゲ、二本挿シダ!』

裸の女核も巻き込んで、薄紅色の肉洞にその腐肉を押し込まれる。ギチギチと膣肉が軋み、痺れを通り越した痙攣けいれんが爪先まで走った。

（この程度の魍魎に……たかが雑魚に!）

目覚めた思念も間もなく沸騰する官能の沼に落ち、ジュウジュウと音も荒く溶けて子宮の熱化を助長する。腰から心まで己が快楽に碎かれる。

敗北を痛感したいま、膣内容積を超える挿入に耐えられるはずがなかった。

「ひぎいいい！ いや、あ、あああああ」

『物凄イ感ジヨウダナ』

『二本モ入レルカラダ。ギャツギャツギャ!』

襲も粘膜も限界以上に伸ばされ、肉壺は完全に塞がれた。恥丘の裏で二本の触手がうね



込み上げる喜びを吐き捨てんと咽を逸らせても、髪が流麗に靡くことはなかった。滅茶苦茶にかき乱されて髪一括りは見る影もなく、肉紐と一緒にになって女侍を縛り、毛先から生臭く粘る汁をダラダラと落とす。

襟は脇腹まで開き、零れた球肉はなおも頭頂をしゃぶられながら。三本の太肉が、各々勝手な律動で数の足りない陥穽を行き来する。

凄絶な性感の入力に神経は狂い、もはや前後左右もわからなかった。熱の塊と化した肉体を荒い呼吸に喘がせ、女穴と肛門から「己が体液」を漏洩する。

「うつく！ あああ、だ……らめ……！」

溢れる淫ら汁は挿送を重ねるにつれて、濁りと粘りを増し、耳にも卑猥な水音を連続した。身体の中からも肉同士の擦れる音が響いてくる。

又チャ！ 又チャ！ 又チャ！ 又チャ！

犯されている。自分は紛れもなく、低脳な魍魎ごときに肉体の表も裏も好き放題に嬲られているのだ。が、その現実もついには快美感に塗り潰された。

(だ……め、も、もう……)

火がついた白紙のように思考がジリジリと焦げていく。焼き尽くされていく。ついには信念も理性も灰となり、唯一牝の悦びだけが残った。

二本の触手がズブリと膺の底を破り、おぞましくも重みある恍惚こうこつを孕んだ違和感が、巢

で休むかのように子宮でとぐるを巻く。

「あっああああん！　そ、ソコお……」

括れを絞る胴当てに外からも締められ、肉壺がギチギチと悲鳴をあげる。沸騰する熱湯が鍋から溢れるかのごとく、凄絶な法悦が勢いを増して骨の髄まで染みだ。

（あ……ああ、き……きもち……）

何もかも失った瞳が妖しくまどろみ、朱唇が笑む。小鼻がヒクヒクと疼く。楓は舌を支える力もないまま、灼けた空気を肺から押し出した。

「い……いイのお！」

虚ろなまなざしで結合部を見下ろし、歓喜と催促を続ける。

「イイの、オマ○コ……オシリ、どっちも！　もつとして、んあああ！」

もはや、気高い狩人の姿も侍の義もなかった。物の怪に怯える人間でさえない。本能に従属する動物の類、淫らに官能を求める品性のかけらもない牝である。

「気持ちイイ、ゴリゴリ、もつと奥、奥うう！」

『ゲッゲッゲ！　本性ヲ現シタナ、牝豚！』

反復運動が秒間二回、三回と加速し、秘肉を颯り抜く。双乳を上下左右に引っ張り、谷間の底でもぬめった触手を滑らせる。

楓が自ら尻を突き上げれば、肛門挿入がさらに深まる。三方から小突かれる子宮がポコ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>